

1 令和7年度の研究方針

令和5年度第61回中・四国小学校体育研究大会（鳥取大会）では、研究主題「ともに学び 未来を創る 鳥取の体育 ～運動の楽しさに浸り 豊かに関わり合いながら 課題を追究する子供～」のもと、各郡市で領域を分担し、研究・実践を積み上げた成果を披露することができた。その中で、研究推進の目玉である①運動・保健の見方・考え方を取り入れた授業、②体育・保健の授業に“浸っている”状態が分かる授業、③準教科書・教科書の活用が分かる授業について、中・四国の先生方からも評価を得ることができた。

鳥取県としての次なる目標としては、令和9年に開催される「第66回全国学校体育研究大会」である。本大会の研究主題が定まるまでの期間は、中・四国大会での就将小の取組を鳥取県の取組とすべく継続するとともに、新たなキーワードをもとに視点を絞って実践を深めていきたと考える。

2 研究主題

ともに学び 未来を創る 鳥取の体育

～運動・保健の楽しさに浸り 豊かに関わり合いながら 課題を追究する子供～

3 キーワードの設定

研究を進めるにあたって指針とするのが、スポーツ庁の定める「スポーツ基本計画」である。令和4年3月25日に、第3期「スポーツ基本計画」を策定し、令和4年度（2022年度）から令和8年度（2026年度）までの5年間で国等が取り組むべき、施策や目標等を定めた計画となっている。第2期計画までを終え、国民がスポーツを「する」「みる」「ささえる」ことを真に実現できる社会を目指すための新たな視点として**新視点1「つくる/はぐくむ」、新視点2「あつまり、ともに、つながる」、新視点3「誰もがアクセスできる」**が掲げられた。

また令和3年に『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」と題して示された中教審答申では、個別最適な学びの実現が示されている。個別最適な学びとは、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「**指導の個別化**」と子供自身が学習が最適となるよう調整する「**学習の個性化**」である。また、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「**協働的な学び**」を充実することが重要視されている。

以上のキーワードを副主題に照らし合わせると、

運動・保健の楽しさに浸り …… 誰もがアクセスできる（＝指導の個別化）
豊かに関わり合い …… あつまり、ともに、つながる（＝協働的な学び）
課題を追究する …… つくる/はぐくむ（＝学習の個性化）

と考えることができる。

よって、第3期スポーツ基本計画で示された3つの新視点をキーワードとして、これまでの研究に新たな価値付けを行い、実践を深めていきたいと考える。

4 研究推進について

（運動領域）

つくる/はぐくむ＝類似の運動（アナログン）による課題の焦点化、自発的なルール作りの場の設定

子供が自発的・自律的に運動に取り組むための手立てとして、課題の明確化が挙げられる。また、自分の成長を実感することで新たな課題が見え、主体的に運動に参加することができる。

課題を焦点化し、段階的な技能獲得のための手段として類似の運動（アナログン）の設定が効果的だと考える。また、子供の技能獲得に合わせ、簡易化されたルールを自発的に再設定する場を意図的に設けることで、主体的な学びにつながるのではないかと考える。

あつまり、ともに、つながる＝ICTと準教科書「わたしたちの体育」のハイブリッド、
ふり返し板の活用

協働的な学びにつなげるため、子供の自発的な話し合いの場を創出したい。その手段の一つとして、ICTを活用し、自分や仲間の動きを確認する場の設定が有効だと考える。しかしながら、実践を積み重ねていく中で、映像を見るだけではポイントを確認しにくく、課題を見付けて伝え合おうとする姿が少なかった。そこで、準教科書「わたしたちの体育」の技の展開図を活用し、デジタルとアナログのハイブリッド化を行うことで、理想の動きとの整合性が図られ、学び合いが活性化すると考える。また、引き続きふり返し板を活用することで、形成的評価のみならず、話し合いのツールとしての活用を重要視していきたい。活用場面や評価軸の設定も、教師のねらいに合わせて柔軟に行い、新たな活用の仕方を模索していきたいと考える。

誰もがアクセスできる＝易しいゲーム・簡易化されたゲームによる「易しい体育」の実現

運動が得意な子供も苦手な子供も、運動のもつ特性に触れながら取り組むために「難しい体育」ではなく、「易しい体育」の実現を図っていく。そのためには、運動のもつ特性（楽しさ）を吟味し、系統性と照らし合わせながら、ルールや取り組み方の簡易化を図ることが大切であると考え。何を楽しさと感じるかは学年や子供の実態に大きく関わる部分であると考え。まさに「個に応じた指導」を実現できる視点だと捉えている。

（保健領域）

つくる/はぐくむ＝養護教諭などの有識者との連携による子供の健康課題への気づきの場の設定

子供が自身の健康課題に自発的に取り組むためには、気づきの場面を設定することが有効だと考える。これまで他人事と捉えていたことを身近に感じることで、主体的な学びへとつながっていく。そのための展開の工夫の一つとして有識者との連携を推し進めたい。養護教諭はもちろん学校医や保健所など専門的な視点で課題を明確にすることで、子供は課題解決に向けた方法を考えたり、ライフスタイルの改善を図ったりすることにつながると考える。また、健康課題の解決に向けて運動を積極的に取り組むような意識を育てていきたい。

あつまり、ともに、つながる＝資料をもとにした話し合いの場の設定、
教科書「わたしたちの保健」の活用

身近な生活における課題や情報を病気の予防やけがの手当ての原則及び健康で安全な生活についての概念等に着眼してとらえ、病気やけがのリスクの軽減や心身の健康の保持増進といった保健の見方や考え方を働かせながら学習を展開したい。そのためには豊富な資料をもとにして話し合う場の設定が必要不可欠であると考え。その際、教科書「わたしたちの保健」を話し合いのツールとして活用する。

誰もがアクセスできる＝実験や体験的な活動の充実

子供の主体的な探求につなげていくには、実験や体験的な活動が重要だと考える。これまでもニンヒドリンを活用した汚れの可視化実験や傷の手当の実践、食品に含まれる脂質・糖分・塩分の可視化など様々な実践が行われている。この実践を共有しながら子供が保健領域に対して主体的に取り組める環境を確立したいと考える。

◎授業研究と体力向上の相関性を意識しながら、実践に取り組む。